

キャリアコンサルティング技能検定 2 級の実技（面接）試験の採点を担当した試験官にアンケートを実施したところ、以下のような意見等が寄せられました。内容は受検者個人に対するものではなく受検者全体の傾向として取りまとめています。キャリアコンサルタントの能力向上を図る学習等の参考となれば幸いです。

なお、本稿は個人個人の課題を表すものではなく、試験の可否判定結果とは一切関係ありません。また、これらは試験の可否について説明するものではないことをご理解下さい。

<面接試験全体（ロールプレイと口頭試問）について（総評）>

事前に提示されたケースの概要を熟考し、しっかりと準備をして試験に臨んだことが、面接の様子から感じられました。入念な準備をして試験に臨む姿勢には敬意を表しますが、ただそれが目の前の相談者をおさなりにするようなことにはなっていないでしょうか。事前に準備してきた通りに面接を進めようということに関心が向いているような受検者も見受けられます。「カウンセリング」において一般的に言われる、相談者自身のことは相談者から教えてもらう、意思決定の主役は相談者にある、ということ念頭に置かれるとよいのかもしれませんが。

また最近の傾向として「自己理解不足」「仕事理解不足」「コミュニケーション不足」という言葉が先行し、問題ありきで、これに目の前の相談者を当てはめてしまおうとする受検者が多いことが気になりました。

■ 基本的態度について

・多くの受検者は「基本的態度」について、ロールプレイで実施されたことと、口頭試問での振り返りに乖離がある（受検者自身の「自己一致」が十分ではない）ケースが散見された。

■ 関係構築について

・相談者を尊重する態度、心配ごとや悩みを気遣う様子など、面接の早い段階で最低限の関係構築ができていた受検者は多かった。

・面接が進むにつれて、相談者への関心よりも事前に準備してきたことに意識が向き、関係性が深まらない様子が見受けられた。望ましい態度をテクニックとして意識しているためか、感情への応答が疎かになり、相談者の理解に至らない場面もあった。また相談においてどこを意識して関係構築に繋がったのかを、口頭試問で振り返りができていた受検者は少ない印象だった。

■ 問題把握について

・丁寧に相談者の言葉を確認し、主訴はしっかりと捉えていた受検者が多かった。

・相談者の問題に対しそれを掘り下げる力が弱く、表層的な問題把握にとどまっており、相談者の「気づき」を促す応答にまで至っていないと感じられる受検者も見受けられた。

・事前に検討したことを確認するかのように、受検者が自分の聞きたいことを聞いて、目の前の相談者をそこに当てはめてしまうことで、早く問題を特定することが目標のような対応が増加している感がある。

■ 具体的展開について

・相談者とともに問題を解決しようとする姿勢・取り組みは、キャリアコンサルティングのマインドとしてはとても重要で、これを理解している受検者は多いと感じた。一方、相談者の話を具体的に聴いているにも関わらず、抽象的かつ一般論的な目標設定や方策にとどまり、具体性や実効性を欠く場合が多く見受けられた。

・解決までの期限を配慮せずに問題を先送りにしたり、あらかじめ用意してきたと思われる、相談者の行動変容に繋がりにくい提案も散見された。

以上